六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

CREATOR INTERVIEW No 70

内藤廣 Hiroshi Naito

1950年神奈川県横浜に生まれる。早稲田大学理工学部建築学科、同大学院修士課程修了後、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所勤務をへて、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。2001年東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学助教授、2002～11年同学研究科社会基盤学教授、2007～09年グッドデザイン賞 審査委員長、2010～11年東京大学副学長、2011～東京大学名誉教授。

photo_tsukao / text_kentaro inoue

海の博物館、牧野富太郎記念館など数々の建築作品を手がけるかたわら、2001 年から 2011 年まで東京大学大学院で教鞭をとった建築家の内藤廣さん。今回のインタビュー中には、伝説のレコードショップ「六本木 WAVE」についての、衝撃の事実も。まずは、企画協力として参加している、21_21 DESIGN SIGHT で開催中の「土木展」についてのお話からどうぞ。

土木の世界は、いい人ばかり !?

大学で土木を教えるようになって驚いたのは、その世界に関わる人たちが、いい人ばかりだということ。こんなこと言ったら怒られそうだけど、僕ら建築家はしょせん、自分がどうなるかが関心のほとんど。あいつは賞をとったらしいとか、あいつはコンペで勝ったみたいだとか。でも土木の世界に、そんなことを言う人はほとんどいません。

彼らが考えているのは、3.11 のような自然災害から人々をどうやって守るかとか、工学的技術を使って暮らしをどう豊かにするかといったこと。個人のことは一番最後、その精神が美しいな、と。自然のいいところも悪いところも全部知っていて、純粋に自然が大好きで、関心があって。河川系の人は、どうしたら川を自然河川に戻せるかを考えているし、海岸工学の磯部雅彦先生なんて、日本全国の海岸を全部泳いだことが自慢ですから（笑）。

僕は建築の世界にいながら、作家性とか作品性みたいなものに対して、どこか疑問に思い

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

つつやってきたので、精神的にも土木の価値観に触れて救われた気がしました。とはいえ自分は建築家としても立たなきゃいけないわけだから、矛盾しているんですけど。

土木展
駅の構内を解体したドローイングやトンネルなどの土木写真、工事現場の音と映像をミックスした「土木オーケストラ」からダムカレーまで。日常生活に必要不可欠な「土木」を通してデザインを考える展覧会。2016 年 9 月 25 日（日）まで、21_21 DESIGN SIGHT で開催中。
http://www.2121designsight.jp/

誤解されている土木のイメージに抗議したい。

僕が教えていた東大で、よく知られたこんなジョークがあります。東大の土木といえば超エリート、卒業して大手のゼネコンに入ると、そんなエリートでも新人研修で地下鉄や道路工事の現場に行きます。そこでマンホールから顔を出していると、横を歩いている若いママが子どもに「ちゃんと勉強しないと、ああいうふうになっちゃうのよ」と言う（笑）。

これこそ、まさに誤解されている土木の姿。そもそも成績がよくていい大学を出たやつが偉い、っていう価値観そのものが古いでしょう。この「土木展」は、そういう間違ったイメージに対してプロテストしたいという思いが、ディレクターの西村浩さんにはあったんじゃないかな。

3.11 が起きても、この国は変われなかった。

建築だけやっている間はわかりませんでしたが、この国を本当に動かしているのは土木ですよ。鉄道も道路も、河川も港湾も空港だってそう。今、僕は名古屋の再開発に関わっていて、そこにはリニア新幹線が通ることになっていますが、駆動系のモーターや車両はともかく、線路を通したりトンネル掘ったりする技術はほとんどが土木関係です。

品川と名古屋が、わずか 40 分。名古屋に帰る友だちと品川で飲んで別れて、あなたが酔っ払って山手線で一周しているうちに、友だちはもう自宅に着いている（笑）。それが、たった 10 年後、ぜんぜん遠い未来じゃないんです。

ここまでは土木のいい面について語ってきましたが、一方で「変われなかった」という苦い思いもあります。僕は、3.11 でこの国が変わるんだと思っていました。でも結局は、変われなかった。復興に関する行政システムがすべて旧来のまま動いてしまって、テーブルの上にある見慣れた道具だけでさばいてしまった。止めようとしたけど止まらなかった ……。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

photo_tsukao / text_kentaro inoue

「小さい正しさ」と「大きい正しさ」。

土木展の映像の中でも話していることですが、「正しさ」には、「小さい正しさ」と「大きい正しさ」の 2 種類があります。大きい正しさというのは、どうしたら被災した人が豊かな生活を築いていけるかということ。小さい正しさというのは、防潮堤をどうする区画整理をどうする、道路をどうするといったパーツ的なもの。

もちろん、小さい正しさはたくさん積み上がっている。ただ、それが本当に大きい正しさにつながっているかは誰にもわからなくて、行政の人も、道路をつくっている人も、気の毒なくらい必死にやっているけど、心のどこかに疑問を持っている。

本当はみんなが大きい正しさを描きつつ、そのまま小さな部分を調整していけばよかった。でも、そんなのやったことがないからできなかった、というのが現実でしょう。これは個人個人の責任というより、この国の社会システム自体の問題です。1960 年くらいからずっとつくってきた社会の仕組みとか、補助金の仕組み、法律の仕組み .....。

脳みそが切り替わるのは、首都直下か南海トラフ。

戦後すぐは、みんな豊かになりたい、だから経済を立て直そうという、はっきりしたものがあったからよかった。それで 50 年やってきたけど、今どうなりたいのって聞いたときに、それを一言で言える人はいませんよね。

おそらく、首都直下型地震がくるか南海トラフが動くか、そのぐらい大きな災害が起こらないと、日本人の脳みそは切り替わらない。ちょっと難しい話をしていいですか？　今回の東日本大震災で亡くなった方は、行方不明者も入れると 2 万人。南海トラフの被害想定が 30 万

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

人から 36 万人ですから、被災規模はだいたい 15 倍。今回の復興には 24 兆円入れることになっているので、単純に計算すると 360 兆円。国はそんなにお金は出せないので、必然的に違うシステムを考えざるをえないでしょう。

国が全部はできないんだから、もうちょっと地域でまとまって考えてね、みたいな話にしないと成り立たない。たとえば、家族というものをどう考えるか、コミュニティをどう考えるか、建築や都市やデザインをどう考えるか。考え方が変わるのはわかるけれど、どういうふうに変わるのかまでは言えない。僕も考えて続けていきたいし、いい方向に変わっていくといいなと思っています。

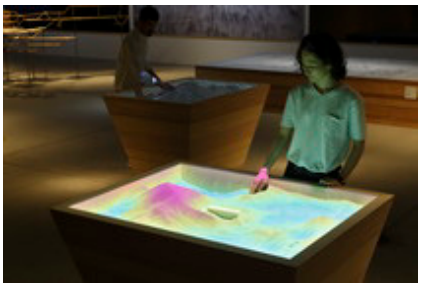
土木展には、未来つながるヒントが詰まっている。

山本リンダの歌に「♪うわさを信じちゃいけないよ」ってあるでしょう？　今は、テレビとか雑誌とか SNS とか、そういうものを見て知ったつもりになってしまう時代。本当にリアルな情報を素手でつかむためには、あるところまで深く降りていくことが必要です。僕の場合は建築というジャンルを深掘りしたけれど、そういう専門分野ができれば、土木でも都市計画でも、もっといえば物理でもデザインでも、あとは全部横につながっていく。

そういう意味で、この土木展には、土木の未来も建築の未来も日本の未来も全部入っている。変わったあとの世界につながるエレメントやヒントが詰まっていると思います。たとえば、ライゾマティクスの展示のセンシングや三次元技術を使った砂場遊びのインスタレーションといった最先端の技術から、具体的にものをつくっている職人レベルの話まで。

あとは、それらを組み合わせて、どうやって新しいものをつくっていくかっていう話。あんまり難しいことばっかり言うとお客さんが来てくれなくなっちゃうから（笑）、まずは体験して楽しんでもらって、あるとき「ああ、そうか」って思ってくれたらいい。

スマホアプリの位置情報を用い、東京の交通網やユーザーの行動を観察することができる作品「土木の行為 はかる：Perfume Music Player Installation」（ライゾマティクスリサーチ）ほか、さまざまな展示が並ぶ。
Photo：木奥恵三



砂場遊びを通して土木の設計者になれる映像インスタレーション「土木で遊ぶ：ダイダラの砂箱」（桐山孝司と桒原寿行／写真）。インタビューのメイン写真は、映像空間でダムに水の溜まる様子を体感できる「土木の行為 ためる」（ヤックル株式会社）。
Photo：木奥恵三

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

photo_tsukao / text_kentaro inoue

「WAVE」の名付け親、実は僕です。

六本木とは関係のない話ばかりをしていますが、なぜ僕がこの街について語る資格があるかというと、実は 80 年代初めに「六本木 WAVE」の立ち上げに関わっていたから。西武グループが WAVE をつくるときのコミッティーに最年少で入って、内田繁さんをはじめとするメンバーたちと、この街についてああでもないこうでもないと議論をしていました。その後、WAVE ができて、街の構造が変わりはじめて …… みたいなことを、一応知っている人間なんです（笑）。

その頃、六本木交差点には外国人がたくさんいて、ネオンサインが光ってて、街はギラギラしていました。堤（清二）さんの言葉で今でも覚えているのは、「みんなが騒いでいる中で、黙るって目立ち方もあるよね」。だから、WAVE はサインもほとんど出さなかったし、百貨店物販の常識を変えようということで、床は板張りに。他にも、WAVE の裏通りの守り神として、アーティストの山口勝弘さんが、立体画像の「ホロニック地蔵」をつくったり、いろいろ面白いことをやりました。30 年以上前のことです。

ちなみに、「WAVE」って名前をつけたのも僕なんです。当時流行していた「ニューウェーブ」とか音楽を連想させるということで提案したものの、役員会か何かでダメと言われてしまった。でも、ロゴを決めるときに、デザイナーの鬼澤邦さんが真ん中の二文字だけ色を変えたら、WE（私たち）の間に AV（オーディオビジュアル）が挟まっているのはいい、ということで決まりました。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

六本木 WAVE
1983 年開店のレコードショップ。音楽をはじめさまざまな文化・流行の発信基地として愛された。六本木地区再開発に伴い、1999 年に惜しまれつつ閉店。跡地は現在、六本木ヒルズ メトロハットとなっている。

都市とは、人間そのもの。

好きな街を聞かれると、僕は 1990 年代前半くらいまでのバルセロナと答えることが多いんです。なぜ 90 年代前半までかというと、オリンピックをやるということで、街をきれいにしてしまったんですね。メインストリートのランブラス通り沿いには「バリオ・ゴティコ」という世界遺産のゴシック地区があって、その反対側には「バリオ・チノ」という地中海最大ともいわれる " 魔窟 " がありました。あやしい人たちがたくさんいて、ひとりではとても歩けないような。

それは、都市の影の部分ですが、バルセロナという街に独特のパワーを与えていました。都市って、人間の思考とか欲望が映し出される、言ってみれば人間そのもの。我々が表と裏を持っているように、都市も表と裏を持っている。裏のない人間なんて、なんだかつまらないでしょう？　でも都市計画とか再開発って、その影を消してしまうわけです。

六本木は、再開発の街になってしまった。

これは六本木にも通じるところがあって、六本木ヒルズ、国立新美術館、東京ミッドタウンができて、すっかり明るい街になってしまった。六本木って、再開発の街になっちゃったんだよね。

ちょっと前までは、もっとパワーのあるディープな街だったんですよ。テレ朝があって芸能人がいて、一本路地を入ると暗くてあやしくて、六本木交差点の周辺が日本の文化発信地になっていた。谷地にあって若者のサブカル系文化が生まれる渋谷とも違って、台地にある六本木は、もっとハイ（カルチャー）で深い。

そういうディープさって自然発生的にできたもので、つくろうと思ってもつくれません。実際、大型開発って投資と回収のゲームだから、そもそも自然発生的なものを受け入れにくい。ましてや未来を予感させるようなカルチャーなんてなかなか生まれないんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

巨大プロジェクトだけで終わるか、「やっぱり六本木」となるか。

もちろん、大型開発が悪いかというとそうも言えない部分はあるけれど、歴史的な変遷もふまえて、次のステージを考える時期にようやくきたかな、と。六本木がこのまま巨大プロジェクトだけの街になって終わっていくのか、そのまわりに面白い街が広がっていて、何かといえば「やっぱり六本木行かなきゃ」って場所になれるのか、今はその分かれ道。

これから先、六本木をどんな街にしていくか、それこそ、この未来会議のようにみんなで考えていかなければいけないと思うんです。

僕がずっと関わっている渋谷もまさに同じ状況で、今やろうとしているのは、ストリート文化をサポートすること。渋谷には、かつて「渋谷ジァン・ジァン」という小劇場がありました。大きな商業施設と比べれば不動産価値なんかほぼないに等しいくらい小さな空間でしたが、本当に濃い文化を発信していた。渋谷の連中とは、そういう場所がまたできないか、っていう話をしています。

渋谷ジァン・ジァン
1969年から2000年まで、渋谷公園通り・山手教会地下にあった小劇場。デビュー前の井上陽水、荒井由実、中島みゆきなどが出演するなど、収容観客数200人未満ながら、音楽や演劇をはじめさまざまな文化を発信していた。

大型開発より中小の開発のほうがはるかに難しい。

渋谷はストリート文化、じゃあ六本木には何があればいいのかといえば、やっぱり「小さい粒」。大きい粒はもうつくったし、これから先も大型開発がいくつも予定されている。言葉は悪いけれど、大型開発は誰でもできます。もちろん地権者をまとめるのは大変だけど、あとはフロアの金勘定をやって積み上げればいいだけ。難しいのは中小の開発、そのほうがはるかに難易度が高いんです。

僕がずっと提案しているのは、たとえば東京ミッドタウンみたいな超高層を建てたら、ちょっと離れた場所に採算抜きで面白い場所をつくられなればいけない、というルール。（今、僕が食べているパスタに入っている）このグリーンピースくらいのものでいい。大したお金じゃないんだから、巨大開発をする代わりに投資してもいいんじゃないかって。

採算抜き、小さな " グリーンピース " をつくろう。

もしかするとライブハウスかもしれないし、ギャラリーかもしれない。常に最先端で一番とんがった文化が吹き出している場所があって、若い世代を惹きつける。すると、巨大な商業施設にやってきたお兄ちゃんやお姉ちゃんが、そこまでテロテロ歩く。イベントが終わったら飯を食わなくちゃいけないってことで、飲食店ができたり、超高層に入っても仕方ないと思っているIT系の企業が移ってきたり。街って本来、そうやってできていくんですよ。

個人的には六本木は、女の子ひとりでは歩けないみたいな裏通りが面白い。でも行政側はそんなことは言えないし、意図的にもつくれない。だから見て見ぬふりをして、なるべく排除しないのがいいですね。六本木には今、そんな裏通りとたくさんのグリーンピースがほしい。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

今日は「土木的な視点から、未来の六本木についてのアイデアを」って言われていたんだけど、こんな話でいいんでしたっけ？（笑）

取材を終えて ……

WAVE の話は、これまでのクリエイターインタビューにも何度も登場していますが、まさか名付け親に出会えるとは ……。この日の取材は、「土木展」プレスプレビューの合間を縫って、ランチをとりながら。土木展の様子はブログでもレポートしています。ぜひご覧ください。（edit_kentaro inoue）

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.